

「湖の上を歩かれる主イエス」

2024年10月25日

夕方になって、弟子たちは湖畔に下りて行った。そして、舟に乗り、湖の向こう岸のカファルナウムに行こうとした。すでに暗くなっていたが、イエスは彼らのところにはまだ来ておられなかった。強い風が吹いて、湖は荒れ始めた。二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出した頃、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。イエスは言われた。「私だ。恐れることはない。」そこで、彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。(ヨハネ 6:16～21)

夕方になり、弟子たちは山から下りてガリラヤ湖畔に来た。そして、舟に乗って、湖の向こうのカファルナウムに行こうとした。既に、辺りは暗くなっていたが、主イエスは、弟子たちの所には来ておられなかった。主イエスを残し、弟子たちだけで船出したのは、マタイ福音書では、弟子たちを強いて舟に乗せ、ご自分は独り、山で祈るために残られたと書いている。25～30スタディオンばかり進んだ頃、湖は荒れ始めた。1スタディオンは185mだから、岸から5kmくらい離れた所で、嵐に遭遇した。ガリラヤ湖は、すり鉢の底に水が溜まったような湖で、突然、上から吹き降ろすガリラヤ湖特有の嵐に見舞われた。弟子たちは舟が沈まないように懸命に陸地を目指して漕いだであろう。嵐と苦闘していた時、誰かが湖の上を歩いて、舟に近づいて来るのを見て、恐れた。人は水の上を歩くことはできないのに、歩く姿を見たのだから、驚愕したのは当然である。舟に近づいて来られた主イエスは、「私だ、恐れることはない」と声をかけられた。弟子たちは主イエスを舟に迎え入れた。すると間もなく、舟は目指すカファルナウムに着いた。

ユダヤ人は、山は神の臨在する「聖なる場」と認識していた。古来、山で神と出会った故事を多く記している。一方、海や湖は混沌として恐怖を与える場と認識している。嵐の湖は人間には制御できないカオスそのものである。主イエスが、その嵐の湖を歩まれるということは、カオスを制される方であるとの信仰告白である。弟子たちが乗った舟(教会)は幾多の苦難に遭遇しただろうが、それらの苦難を制して歩まれる主イエスに支えられて来た。湖上歩行の奇跡は、その感謝と喜びを伝えようとしているのではないか。

マタイ福音書は、興味深いペトロの言動を記している。主イエスが湖の上を歩いて来られ、恐れる弟子たちに「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と言われると、ペトロは、「主よ、あなたでしたら、私に命令して、水の上を歩いて御もとに行かせてください」と願った。主イエスは「来なさい」と言われるので、ペトロは舟から湖に体を乗り出し、水の上を歩いて、主イエスの方に進んだ。ペトロも水の上を歩けたと書いている。ところが、ペトロは風を見て怖くなった。すると、ペトロの体は水の中に沈みかけた。「御もとに行かせてください」、「来なさい」という会話、そして、舟から体を水の上に乗出すという行動はあり得ないが、カオスを制する主イエスを見つめて歩けば、湖の上を歩くことができる。しかし、カオスに目を奪われた途端、沈みかけた。ペトロが「主よ、助けてください」と叫ぶと、「信仰の薄い者よ」と叱責されるが、手を伸ばして助けてくださった。

著者マタイはペトロの言動をユーモラスに描き、信仰と不信仰を分かり易く伝えている。主イエスに目を注ぐ信仰があれば、どんな苦難をも乗り越えられるが、主イエスから目を離し、嵐(苦難)に心を奪われる不信仰に陥れば、自滅してしまう。しかし、「主よ、助けてください」と叫べば、不信仰の中からの叫びにも、主イエスは応えてくださる、と。